

相対最上級の接続法：『キホテ』の場合

El modo subjuntivo del superlativo relativo en el Quijote

三 好 準之助
Junnosuke MIYOSHI

1. はじめに

スペイン語では比較級語を使って相対最上級という概念を表現することができる。⁽¹⁾ 特定指示物に相対最上級という意味が付与されるのであるが、その場合、比較判定の相対性を実現させるために、問題の指示物の比較の対象の範囲を限定指示しなくてはならない。この限定指示の方法はいくつかあるが、関係節（形容詞節）もそのうちのひとつである。⁽²⁾ 関係節を伴う相対最上級の表現は誇張という文体的効果を出すようだが、たとえば次のような用例⁽³⁾がある。

- 1 Tabaco holandés, el mejor que hay. (Día, 126)
- 2 El sol de aquella mañana era el más amigo que Pedro viera en su vida. (Tiempo, 42)

関係節の定動詞はそれぞれ直説法、接続法である。

他方、スペイン語におけるこの構文に関して様々な観察や見解が発表されている。この構文の使用状況、⁽⁴⁾ 先行詞が【定冠詞＋比較級語】であることと関係節の定動詞が接続法になることとの関係、⁽⁵⁾ その接続法を選択する要因などが検討対象になっているのであるが、さらにはこの接続法の使用にフランス語の影響があるとする意見⁽⁶⁾まで公表されている。

そこで筆者はこの関係節における法選択の実態を調査することにした。まず、コーパスはフランス語の影響があるとは考えにくいものということで古典期の文学作品にすること、強調表現が豊富に見つかると思われる作品であること、ということでセルバンテスの『キホテ』⁽⁷⁾にした。

以下で接続法選択の要因として主張されている諸要素を概説し、『キホテ』での用例を紹介し、その用例が概説の諸要因で説明できるかどうかを検討する。

2. 接続法選択要因と考えられる諸要素

古典期のスペイン語の接続法を扱うとき、現代では過去時制の -se 型とほぼ同義であるとされている -ra 型に特別な注意を払わなくてはならない。Keniston (440～)⁽⁸⁾によれば、-ra 型が現在のように -se 型と同義の時制として使用されるのは16世紀の第4四半期からである。またセルバンテスの言語を広範に研究した Cejador (253～)によれば、単純に過去時に対応する接続法は -se 型のみであり、彼の調査ではセルバンテスを含む古典期にそれと同義で使用されている -ra 型はないし、後者はほとんどの場合、条件文の帰結節で使用されているので Subjuntivo Potencial Futuro と呼ばれるべき時制であるという（ちなみに -ría の時制は Indicativo Potencial Futuro）。そして両者ともに直説法過去完了に相当する用法のあることを指摘している。

それでは相対最上級の関係節における定動詞が接続法になるときの要因として考えられる要素をまとめて紹

介してみよう。

2.1. 話者の主観的意味合いの表示

問題の接続法には話者の主観的な意味合いが表示されているという。現代語については Carlsson (22) が、中世語については Jensen (27) や Cejador (255～) がそのように主張している。

2.2. 接続法にならない場合

接続法選択の要因そのものではないが、反対に、関係節の内容が現在・過去の事実であれば接続法にならず、直説法が採用されるという(中世語で Keniston (394), Jensen (26) など)。

2.3. 内容の仮定的性格の表示

Bello (333) は近代スペイン語について、その関係節の内容が仮定的であれば接続法になるのだと述べている。

2.4. 関係節の行為の遂行の将来時性

関係節の内容が主動詞の遂行時にくらべてその後遂行されるものであるとき、関係節の定動詞は接続法になるという。この主張は Bello (333) をはじめ、現代語では Carlsson (21)、中世語では Jensen (27) や Keniston (393) に見られる。

2.5. -ra 型の直説法過去完了の用法

接続法 -ra 型は直説法過去完了の意味で使用されることがあるという(現代語では Carlsson (22)、中世語では Cejador (256), Keniston (441))。

2.6. 主動詞の法の牽引

現代語では Carlsson (22) が指摘しているが、主動詞の法に牽引されて従動詞も接続法になることがあるという。

2.7. 動詞 poder のこと

Cejador (214～6) は動詞 poder を助動詞として扱ってはいないが、Jensen (27) はそうしている。そして後者はこの構文で接続法が選択される現象を6項目で解説しているのであるが、そのうちの2項目で poder にふれている。すなわちこの動詞は法性を表現するので、この動詞があれば直説法でいいのであり、この動詞が接続法になっているのなら二重の法性表示になるという。また Carlsson (22) は poder の現在形は接続法になりやすいと指摘している。そして Rodríguez (131) もこの動詞があれば、直説法である場合もあるが接続法選択に力を貸すという。

2.8. 否定対極語による牽引

最上級という構文自体が否定誘発要素 (activadores negativos) であるとする Bosque の指導を受けた Rodríguez (131 など) は、関係節に否定対極語があれば接続法が選択されやすいという。現代語に関しては、jamás や en mi/su vida など否定対極語にされている。⁽⁹⁾

接続法選択要因となるかもしれない要素として本稿で検討するのは以上の8項目である。しかしこれらの要素が単独で作用することで接続法が選択されると考えないほうがよいであろう。実際にはいくつか微妙に組み合わせられて作用しているに違いない。

3. 『キホテ』の関係節を伴う相対最上級表現

さて、『キホテ』で使用されている比較級語表現のうちで関係節(形容詞節)を伴う相対最上級の用例を数えた

ら196例（従動詞が接続法になっているものが31例と直説法になっているものが165例）になった。⁴⁰ Don Quijote が52回（接続法のが5例、直説法のが47例）、Sancho が合計19回（接続法3例／直説法16例）である。また語りの部分に53例あった（15例／38例）。

関係節の定動詞が接続法である場合、その時制を区別して主動詞の法・時制との対応関係を量的にみてみると以下ようになる（Sは接続法を、Iは直説法を示す）。

- a S 過去 -ra 型10：I 不完了過去 5，I 完了過去 3，I 現在完了 1，S 過去 -ra 型 1
- b S 現在 7：I 現在 6，I 未来 1
- c S 未来 6：I 現在 3，命令法 1，I 未来 1，S 現在 1
- d S 現在完了 3：I 現在 3
- e S 過去完了 -se 型 3：I 完了過去 1，I 過去未来 1，I 過去未来完了 1
- f S 過去 -se 型 2：I 不完了過去 1，S 現在 1

4. 接続法選択の要因の確認

さて、『キホテ』で使用されている関係節付き相対最上級の用例 196 のなかで関係節に接続法が使われているものが 31 例あった。さまざまな要素によってそこに接続法が選択されているのであるが、そういう要素のうちで選択要因となっていると考えられるものを本稿の 2.2. にあげておいた。主としてそれらの要素に従って用例を検討すると、以下のような結果になった。

4.1. 話者の主観的意味合いの表示

接続法の選択が話者の主観的な意味合いの表示のためであるとする、実際この要因はかなりの数の用例で作用していると推測される。この作用があるかどうかの判断は困難であるので、単なる目安として以下の例文を紹介するとどめよう。関係節の定動詞の時制の区別を明示すれば以下ようになる。

4.1.1. S 過去 -ra 型：主節の定動詞が I 不完了過去の場合が例文 3，I 現在完了である例文が 4 である（用例の末部の括弧のなかに第 1 部か第 2 部か、その第何章か、そして Rodríguez Marín 版の頁数、それが登場人物の発話の一部であればその人物名を示しておいた。人物名のない用例は語りの部分に含まれていることになる。主節の定動詞と関係節の定動詞にほどこされている下線は筆者のもの）。

3 deseaba verse con él para celebrar los dos la mentira y la verdad más disimulada que jamás pudiera imaginarse. (I, XXXIV, 253)⁴¹

4 alguna mudanza han hecho en mí ciertos acaecimientos de buena ventura, [...], la mejor que yo pudiera desearme; (I, XXXVII, 309: Princesa)

4.1.2. S 現在：主節が I 現在の場合にもこの作用が意識される。例文 5 がその用例のひとつである。

5 ellas vienen las más galanas señoras que se puedan desear, (II, X, 187: Sancho)

4.1.3. S 未来：主節が I 未来であるのが例文 6 の 1 例であるが、主節が命令法であるものも 1 例ある。例文 7 である。

6 que los versos yo los haré: si no tan buenos como el sujeto merece, serán, por lo menos, los mejores que yo pudiere. (I, XXXIV, 222: Lotario)

7 Perdóname y pide á la fortuna, en el mejor modo que supieres, (II, LV, 10: Sancho)

4.1.4. S 現在完了：主節がI現在の場合のひとつが例文8である。

8 Ó yo me engaño, ó ésta ha de ser la más famosa aventura que se haya visto; (I, VIII, 200: Quijote)

4.1.5. S 過去完了 -se 型：主節の定動詞がI完了過去の用例が1例ある。

9 fué á abrazar á don Quijote, diciéndole ser el más buen caballero que en ningún siglo se hubiese visto. (II, XLI, 87)

4.1.6. S 過去 -se 型：主節がI不完了過去になっているのが1例あった。例文10である。そして主節がS現在であるのが例文11である。

10 le prometía, [...], de darle el mejor condado que en él hubiese. (I, XXXV, 268)

11 Todo esto es así, señor don Quijote [...]; pero quisiera yo que los tales censuradores fueran más misericordiosos y menos escrupulosos, sin atenerse á los átomos del sol clarísimo de la obra de que murmuran; que si aliquando bonus dormitat Homerus, consideren lo mucho que estuvo despierto, por dar la luz de su obra con la menos sombra que pudiese; y quizá podría ser que [...] (II, III, 80: Carrasco)

4.2. 接続法にならない場合

関係節の内容が現在・過去の事実であれば接続法にならないという指摘がある(本稿2.2.2.)。しかしこの要素は4.1.との対概念にはならない。そして、客観的に判断してそのような事実であると思われる内容のときにも接続法が選択されている場合がある。筆者の判断では5例あった。関係節が接続法現在完了の3例(例文8)、接続法過去完了 -se 型が例文9の1例、接続法過去 -se 型が例文10の1例である。例文の前2者をそのように判断する根拠として次のような直説法である例文を紹介しておこう。

12 la linda Dulcinea del Toboso, por quien yo he hecho, hago y haré los más famosos hechos de caballerías que se han visto, vean ni verás en el mundo. (I, V, 138: Quijote)

4.3. 内容の仮定的性格の表示

関係節の内容が仮定的なものであることを接続法によって表示するという指摘がBelloにみられるが、その指摘自身は納得できる。しかし過去に使用された用例についてこのような接続法選択の要因が作用しているのかどうかを検証するのは難しい。本稿の例文5～13のすべてについて、仮定的な性格が表示されるのだと言われれば、それはそうかもしれない、ということになる。「仮定的性格」というのは「話者の主観的意味合い」の具体的な把握のひとつとして解釈されるべきものではなからうか。

4.4. 行為の遂行の将来時性

関係節の内容の遂行が主節の内容にくらべてその後起こるものである場合、関係節に接続法が選択されるという指摘がある。この要素がどれほど効力を発揮しているかを『キホテ』の用例で検証してみると、問題の将来時性が意識されていて接続法となっているものが7例あった。

4.4.1. 関係節がS現在：主節がI現在の用例が2例(例文13)、主節がI未来の用例が1例(例文14)あった。

- 13 De mí sé que me he de quejar del más pequeño dolor que tenga, (I, VIII, 196 : Sancho)
 14 si esto sucede, con la más mínima señal que me hagáis pondré un sello en mi boca y echaré una mordaza á mi lengua. (II, XXVII, 183 : Quijote)

4.4.2. 関係節が S 未来 : 主節が I 現在のものが 4 例 (例文15) あった。

- 15 Y así, me voy por estas soledades y despoblados buscando las aventuras, con ánimo deliberado de ofrecer mi brazo y mi persona á la más peligrosa que la suerte me deparare, en ayuda de los flacos y menesterosos. (I, XIII, 289 : Quijote)

4.4.3. 他方, このような将来時性が読み取れる場合に関係節の定動詞が直説法になっている使い方が 13 例にみられた。接続法の用例と直説法の用例を数量的にくらべると, 逆に次のような直説法のほうが多いという結果になる。

- 16 es vuesa merced uno de los más famosos caballeros andantes que ha habido, ni aun habrá, en toda la redondez de la tierra. (II, III, 67 : Bachiller)

さらに, 接続法になっている用例はどれも「話者の主観的意味合いの表示」と解釈することも可能なようである。この点にも留意しなくてはならない。

4.5. 接続法 -ra 型の直説法過去完了の用法

関係節に接続法 -ra 型が使用されている用例は 10 例あった。しかしそのうちの 9 例で定動詞が pudiera 系であり, 残りの 1 例が acertara であったが, いずれも現代スペイン人の言語直観では直説法過去完了との置き換えは不可能のようである。⁴⁴ だがいずれの用例も接続法過去完了との置き換えならほぼ可能であろうということになった。1 例だけ紹介しておこう。

- 17 Hízolo así, y quedó don Quijote con la más extraña figura y más para hacer reir que se pudiera imaginar. (II, XXXII, 265)

そしてこの場合もまた, すべて「話者の主観的意味合いの表示」のための接続法であるとすることもできよう。

4.6. 主動詞の法の牽引

4.6.1. 関係節のなかには主動詞の法の牽引によって接続法を選択することになる場合もあるという指摘がある。そういう視点から用例を検討してみると, この要素が作用していると思われるものが 2 例 (例文18) あった。

- 18 me podrás creer que quisiera que este libro [...] fuera el más hermoso, el más gallardo y más discreto que pudiera imaginarse. (I, Prólogo, 7)

しかし主動詞が接続法で関係節の定動詞が直説法の場合が 7 例もある。

4.6.2. 他方, 主動詞が (法に準ずる時制形である) -ría 型であるときに, 例文 19 のように関係節に接続法の見られるものが 2 例あった。

- 19 antes le ha de contar de la manera que le sabe, aunque no le acabe en seis días; si tantos fuesen, serían para mí los mejores que hubiese llevado en mi vida. (II, XXXI, 248 ; Duquesa)

4.6.3. さらに、主動詞が命令法の場合も関係節が規則的に接続法になるわけではなさそうである。接続法が1例(例文7)と直説法が1例あった。

4.7. 動詞 poder のこと

動詞 poder を含む関係節の場合、その定動詞は接続法を選択しやすいという観察があるが、『キホテ』の用例ではどうであろうか。poder を含む用例は全部で45例ある。接続法になっている全用例数31のなかの16例(pudiera 系9, pueda 系4, pudiere 系2, pudiese 1)と、直説法の全用例数163のなかの27例である。

4.8. 否定対極語による牽引

筆者はいまだスペイン語における否定対極語の一覧表を参照することができないが、そうである可能性の高い語句だけについて「接続法/直説法」の割合を示すと、以下のようになる。

jamás: 1/14; ni: 0/7; ninguno: 1/1; nadie: 0/1; 後置の alguno: 0/1; en el/este mundo: 1/27; del/de orbe: 1/1; en/de mi/tu/su/esta vida: 1/8

4.9. 主動詞の時制による牽引

主動詞が直説法未来のときに関係節が接続法になる傾向はあるのだろうか。本稿の用例のなかにそのようなものが4例あったが、同時に直説法の関係節のも2例あった。

4.10. 主動詞の意味による牽引

それでは、主動詞の意味によって関係節が接続法になるという傾向はどうであろうか。計測は複雑になるから、代表的な用例だけあげると、主動詞が[haber de +不定詞]で関係節が接続法の場合が4例、poder で接続法が1例、desear で接続法が1例あるが、他方では主動詞が ser 動詞の直説法であるのに関係節が接続法であるのも4例あった。

5. 結論

以上、『キホテ』の関係節付き相対最上級の用例を検討した結果、当該構文の関係節における定動詞の法が接続法になるときの要因として指摘されてきた要素のうちの多くが、それほど説得力のある要因にはなっていないということになった。

a 話者の主観的意味合いの表示：この要素はすべての用例にあてはまるように思われる。問題は、こういう意味合いが表示されているのかいないのかは、話者にしか断言できないということである。客観的な判定は難しい。

b 内容の仮定的性格の表示：関係節の意味的な内容に仮定的な性格があるときに接続法になるというが、本稿の用例検討では「話者の主観的意味合いの表示」と同様、客観的な判定が困難な要素である。なお、接続法 -ra 型が10例あったが、その通時的特徴を考慮すれば、この仮定的性格の表示との濃い関連の存在が推測されよう。

c 行為の遂行の将来時性：この要素も接続法選択の明確な要因にはなっていなかった。本稿の扱った用例ではむしろ直説法の場合のほうが多かった。

d 主動詞の法の牽引：主動詞の法によって関係節の定動詞が接続法になるという現象も傾向としては認めがたい。さらに主動詞が直説法である用例が圧倒的に多いのであれば、それを用例全体の接続法選択を支配する要因として扱うこともできない。

e 動詞 poder のこと：この動詞の存在と関係節の接続法選択とのあいだには、本稿の検討対象に限ってみると

何らの関連も見付けだすことができない。

f 否定対極語による牽引：否定対極語に関する定義は不十分であるものの、それらしい語句が関係節に含まれていてもその法選択との関連性が見いだせなかった。

g 主動詞の時制や意味による牽引：主動詞によるこの種の牽引も接続法選択要因として認められるほどの現象とはなっていない。

結局、消極的な結論にしか達することができなかった。このような結論でもスペイン語接続法の通時的研究にとってひとつの参考資料にでもなれば、と願っている。(なお本稿の研究に関して神戸市外国語大学の福嶋教隆氏および摂南大学の稲本健二氏に貴重な文献を参照させて戴いた。記して感謝申し上げる。)

注

- (1) この構文の相対最上級性については三好 89 (203頁など) を参照されよ。
- (2) cf. Esbozo (de la Real Academia Española), 419~20.
- (3) 三好 89 から。
- (4) Butt et al. (pág. 241) は希少, Carlsson (21) は普通だと指摘している。
- (5) Rodríguez (pág. 137) は直結せず, Navas Ruiz (86) は関連ありとする。
- (6) Bello (pág. 333), Hanssen (239), Moliner (1235) などにある。現代ロマンス語での用法を調査した Carlsson (24) によれば、現代イタリア語では接続法が7割弱、現代フランス語では接続法が9割弱を占めている。
- (7) 参照した版は Espasa-Calpe が1964~68年に出版した Francisco Rodríguez Marín, “Cervantes: El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha”。また R.M. Flores, “Cervantes: Don Quixote de la Mancha (An Old-Spelling Control Edition Based on the First Editions of Parts I and II)”, Vancouver をも参照した。
- (8) 括弧のなかは参考文献の頁数である。
- (9) Bosque および宮本 (pág. 84) など。
- (10) ‘lo’ の用例は省いている。計測の仕方によれば本稿の用例数も揺れる。
- (11) Flores 版では *mentira, verdad, disimulada* の後ろにコンマがある。
- (12) 本稿の例文2の *viera* などは直説法過去完了と置き換えるという。

参考文献

- Bello, A. & Cuervo, R. J., 1970, “Gramática de la lengua castellana”, Buenos Aires (1847).
Bosque, I., 1980, “Sobre la negación”, Madrid.
Butt, J. & Benjamin C., 1989, “A New Reference Grammar of Modern Spanish”, London (1988).
Carlsson, L., 1969, “LE TYPE: C’est le meilleur livre qu’il ait jamais écrit, EN ESPAGNOL, EN ITALIEN ET EN FRANÇAIS”, Uppsala.
Cejador y Frauca, J., 1905, “La lengua de Cervantes, T. 1: Gramática”, Madrid.
Hanssen, F., 1966, “Gramática histórica de la lengua castellana”, Paris (1913).
Jensen, F. & Lathrop, T. A., 1973, “The Syntax of the Old Spanish Subjunctive”, Mouton.
Keniston, H., 1937, “The Syntax of Castillian Prose: The Sixteenth Century”, Chicago.
宮本正美, 1981『スペイン語接続法入門』大阪。
三好準之助, 1981「現代スペイン語の法選択に関する一仮説」京都産業大学論集第10巻第3号126~149頁。
三好準之助, 1989「現代スペイン語の不等比較表現の実態」京都産業大学論集第19巻第3号197~245頁。
Moliner, M., 1970, “Diccionario de uso del español (H~Z)”, Madrid.

- Navas Ruiz, R., 1986, "El subjuntivo castellano", Salamanca.
- Ramsey, M. M. & Spaulding, R. K., 1967, "A Textbook of Modern Spanish", New York (1894).
- Real Academia Española, 1973, "Esbozo de una nueva gramática de la lengua española", Madrid.
- Rodríguez Gonzalo, C., 1986, "La alternancia modal en las oraciones de relativo", Memoria de Licenciatura, presentada a la Universidad Complutense de Madrid.